

東北大学機械系

# 同窓会ニュース

2019.1

第24号

叙勲

機械系同窓会の現状―同窓会への期待

機械系同窓会に寄付しました

東京イベント開催

機械科学技術国際共同大学院プログラム

オープンキャンパス開催

学部3年生の近郊・学外見学報告

坂真澄教授最終講義

教員着任挨拶(市川裕士准教授・古澤 卓准教授・塚本貴城准教授)

寄付に関するご報告

同窓会報告

総会・特別講演会のご案内

学生支援に関するご報告/事務局便り/会費納入について/編集後記

20 19 13 12 10 9 8 7 6 5 4 3 2

東北大学機械系同窓会

〒980-8579

仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-01

東北大学工学部機械知能・航空工学科内

電話：(022) 795-6926

FAX：(022) 795-6926

E-Mail：dousou@mech.tohoku.ac.jp

ホームページ：

<http://alumni.mech.tohoku.ac.jp/>

印刷 笹氣出版印刷株式会社

## 会費納入のお願い

同窓会は、会員皆様が納入される会費によって運営されています。会費納入に対するご協力をお願い致します。

◎年会費 2,000円

## 小菅一弘教授、紫綬褒章を受章

ロボティクス専攻 教授 平田 泰久

機械系同窓会の皆様にロボティクス専攻教授小菅一弘先生が「ロボティクス研究功績」により、平成30年秋の叙勲において紫綬褒章を受章されましたことをご報告申し上げます。永年にわたる教育と研究に対するご功績が高く評価された誠に喜ばしい知らせでした。

小菅一弘先生は、昭和53年に東京工業大学工学部を卒業し、昭和55年に同大学大学院理工学研究科修士課程を修了されました。その後、日本電装株式会社（現株式会社デンソー）に入社され、昭和57年に東京工業大学工学部助手に着任されました。平成元年には米国MITにて客員研究員を務められ、平成2年名古屋大学工学部助教授を経て、平成7年に東北大学工学部教授に就任されました。

小菅先生はこれまで複数ロボットの協調制御システムや人とロボットの協調制御システムの研究開発に取り組まれ、特にロボット技術を社会に還元することを前提とした実用的な研究において当該分野に多大な研究業績をあげておられます。

人とロボットの協調制御の研究においては、人間の動作分析に基づき人間に適応して運動を生成するロボット制御手法を提案し、世界で初めて人と社交ダンスを踊るロボットを開発しました。また、その技術を拡張し、ロボットが適切なタイミング・場所で人間の作業者に部品やツールの手渡し人間協調型作業支援ロボットの開発を行いました。近年では、

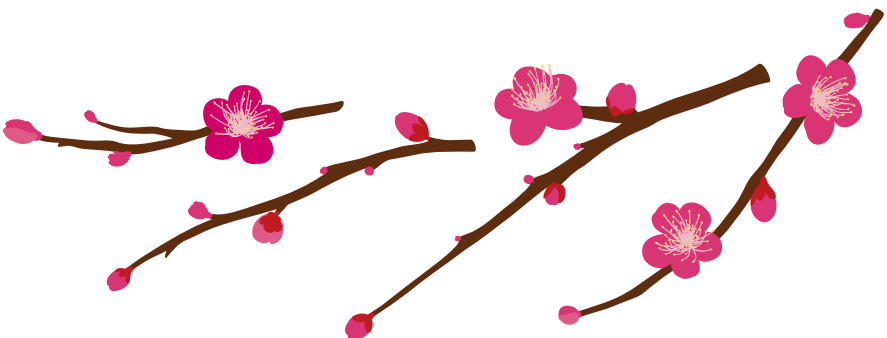
人間が使っているツールをロボットでも取り扱えることが可能なロボットハンドを用いて部品やツールのマニピュレーションを行うユニバーサルマニピュレーションという概念を提唱しています。

これらの研究業績により、多くの論文賞、研究業績賞などを受賞され、また、日本機械学会フェロー、計測自動制御学会フェロー、日本ロボット学会フェロー、日本自動車技術会フェロー、IEEEフェローの称号が授与されました。小菅先生は、ロボットという幅広い応用分野を有する研究領域において、たぐいまれなアイデアとそれを実現するシステムインテグレーション技術、制御技術に基づき、産業用ロボットから福祉ロボットに至るまで、社会に還元されるロボット技術の発展に貢献されています。

国の研究力強化のために、科学技術振興機構研究開発戦略センター特任フェロー、独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員、文部科学省研究振興局科学官等を歴任され、また、グローバルな活動として、IEEE Robotics and Automation Society President、IEEE Division X Director等を歴任し、2016年はIEEE Technical Activities Vice President-Elect、2020年はVice Presidentを務めることになっております。

以上のように、小菅先生は、ロボティクス分野において多大な研究業績をあげ

ていることに加えて、国内のみならず国際的な研究力強化に向けた取り組みに尽力されており、その功績はまことに顕著であります。このたびの受章、誠にありがとうございます。





機械系同窓会幹事

田沼 唯士

(機械工学科53年卒)

私は機械工学専攻を修了後、1980年4月から株式会社東芝に勤務して発電用蒸気タービンの研究・開発・設計、更に重電製品の設計・製造に関する経営変革・戦略等を担当し、役職定年となった2010年からは帝京大学において機械工学に立脚した研究と教育を続けています。また、この間に文部科学省研究振興局の技術参与を経験する機会を頂いています。仕事と平行して、2011年から機械系同窓会東京幹事として同窓会運営に参加させて頂いています。産学及び官を経験した視点から、同窓会への期待と機械系同窓会の活動の一端を紹介させて頂きます。

私にとつて、同窓の卒業生との最初の接点は1976年、学部3年春の工場見学会でした。この時、首都圏では石川島播磨重工業株式会社(現 株式会社IHI)、田無工場(ジェットエンジン)、東京芝浦電気株式会社(現 株式会社東芝)タービン西工場(蒸気タービン・ガスタービン)、新日本製鐵株式会社(現 新日鐵住金株式会社)君津工場(製鉄)等、中京地区に移動して、トヨタ自動車株式会社本社工場(エンジン、自動車組立)、日本デンソー(現 株式会社デンソー)工場(自動車制御部品)等を見学しました。当時は、第一次オイルショックを乗り越えて生産増強の時期を迎えており、各社で私達を迎えてくれた機械系OBの

技術者諸氏の活力にあふれた自己紹介に圧倒され、機械系技術者としての将来に大いに希望を抱いたことを覚えています。その後、東芝に就職して、今度は後輩学生の見学を迎える立場になり、ほぼ毎年来て頂く東北大学の工場見学の折に、機械系技術者の仕事がいかに面白いのか、やりがいがあるかを自分のその時々仕事の紹介を通じて後輩の皆さんに伝えてきたつもりです。その後、母校の機械系学科とのつながりは、学科単位の企業訪問の受入などの求人関連のイベントだけでなく、先輩や後輩の母校教員の皆様への奨学寄付・研究委託・共同研究などを通じて、研究開発を一緒にさせて頂く関係へとスコープが広がり、大学に移った今でも母校と共同研究を続けさせて頂いています。この様な交流関係は、企業にとつてはもちろんのこと、卒業生を通じて、または産学連携研究を通じて大学での研究と教育が産業や社会にどのように貢献しているかを知る上で、大学にとつても重要な意味を持つていると思っています。

一方で、東北大学機械系の機械工学科、機械工学第二学科、精密工学科および大学院の各専攻は何回かの改組を繰り返して、学部は機械知能・航空工学科に一本化されましたが、大学院は研究科をまたいだ10専攻、2研究所、3センターからなる大きな組織に成長しています。私達が所属していた研究室も教授の世代交代とともに、当然のことながら組織が大きく様変わりしています。それに伴って、従来は意識しなくても綿々と続いていた、OBと教授・研究室、企業と学科・

研究科・専攻、卒業生と現役学生との交流がとぎれとぎれになり、一端途切れると接点を見つけるのが困難になり始めている事例を見聞きするようになっていきます。このような変化に際して、機械系同窓会は従来からの産学連携の伝統を維持し、発展させて行く要の役割を果たしていると思います。更に、学生と教員、そして卒業生が機械工学の未来を語り合う場になって行くことが求められていると思います。

昨年10月に機械系同窓会の新しい試みとして、東京講演会(会場：帝京大学霞が関キャンパス 写真)が同窓会東京幹事の神純一氏(株式会社IHI顧問)他の同窓の皆さんのご尽力で開催されました。東北大学からは足立幸志教授と祖山均教授、吉村達彦副会長他多数の機械系同窓会役員、そして若手から大先輩まで大勢の会員が参加されました。羽山信宏氏(元マツダ株式会社取締役執行役員専務パワートレイン開発本部長)にはSKYACTIVエンジン開発における機能エンジニアリング設計と機械工学の未来を語って頂き、石塚達郎氏(機械工学科53年卒 日立建機株式会社 代表執行役員



機械系同窓会東京講演会  
(2018年10月13日)のひとコマ

## 機械系同窓会に寄付しました

精密学科昭和42年卒

富田 務

長)と柳氏がmoderatorを務めたパネルディスカッション『機械産業／機械工学を取り巻く環境の変化への対応／電動化が進展する中で機械工学の役割』では機械系同窓会代表幹事の足立幸志教授にもご講演頂き、EV・自動運転に関する話題が社会の注目を集め、AI技術者が優遇される状況にあって、機械系のもつくり産業に携わる企業の役割、技術者・研究者を育成する大学の役割、そしてものづくり産業の将来ビジョンや機械工学の将来性について語り合いました。会場からもたくさん意見が出て、機械工学はこれからも必要とされるとの声が多かったのですが、これから大学を選ぶ若い世代に機械工学の未来のビジョンを発信して行く重要性も指摘されました。もとより、同窓会の講演会で早々に結論を出せるとは思いませんが、このような議論と交流の場を持つことは、同窓会の良さではないかと感じました。

私達「精密42会(有志)」は本同窓会に寄付をさせて頂きました。

### 一、動機は「卒業50周年記念」

精密42年卒は、還暦を過ぎてから数年前ごとに旅行会をやっていますが、2017年5月は福井県芦原温泉でした。数年前から、この会に卒業50周年記念の声がちらちら聞こえており、これが現実に宴会に先立つミニ会議の議題になったので

す。会議では、各種意見が出る中で不肖私は寄付の案を説明しました。白熱した議論の後、最後に終身会長・福田紀之君から「言いだしつべの君が案を作れ」の一声が私に飛んで、スッと寄付案に収束した次第です。

### 二、寄付発想の理由

これは、(一)恩返し、(二)東日本大震災、(三)大学の財政問題 です。

機械工学を、力学系・材料系の科学を基礎として人間と社会に役立てる技術を生み出して人類に貢献する工学ととらえれば、その役割と重要性はこれからも変わらないと思います。一方で地球温暖化対策や機械学習・ICT技術等の台頭が経済活動に大きな影響を与えつつある現代において、機械系の学生と教員、機械工学に関連する企業技術者をゆるやかに結びつける同窓会への期待は、従来にも増して大きくなっていると考えます。

(一)は、説明の必要がありません。(二)は、ご存知のように、あの2011年震災時に東北大学は各種の困難に晒され、被災した学生さんが学内の寝泊まりを余儀なくされたとも聞きました。(三)は、2004年来の国立大学法人化に伴う大学予算削減であり、内容は前年比1%減(等比較数)。結果的に国立大には未曾有の金策が課せられています。

### 三、寄付活動

直ぐ準備に入り、総額のイメージ作りと寄付先を機械系同窓会に決めるのは容易でしたが、振込口座の開設に手こずり

ました。銀行、郵便局ともにガイドが固く(犯罪への悪用警戒)、職員に申請書類の一字一句を何度も指摘されて書き直す都度、代表者・福田会長印が押し直しになるのです。短気な私は結局会長の印鑑「もどぎ」を作成して、やっと克服できました。

いよいよ同胞各位に趣意書・依頼書を発信したところ、何と驚きの額が瞬く間に集まり、皆さんの志の高さに感動しました。賛同者数は実質対象者40名中の24名、寄付額は様々。議論が5月で事務局送金が8月という電光石火の早業でした。

### 四、寄付の意義

以上があらまですが、振り返ると、これ以前に二つの布石があったのです。一つ目は、同年3月の同窓会総会前夜の懇談の場。役員の端くれを仰せつかる予定の私は、加藤康司名誉教授、足立幸志教授と祖山均教授から、大学の現状、特に運営上の様々な話を聞かせて頂き、外にいる私には大変参考になりました。

二つ目は、同年2月頃の文芸春秋に載っていた東大校長と慶応大学長の対談記事。話題は大学の財政問題と寄付でしたが、これが中々刺激的でした。例えば、M・I・T、ハーバードなどの私立大は、日本に帰国した先輩まで寄付依頼が追っかけて来るとのことで、その熱意と充実した卒業生名簿の存在に感嘆しますが、その手段が現役学生のナマの声(国際電話)なのです! 又、慶応大学長は「寄付集めは学長の最重要任務の一つである」と述べておられました。

以上の二つが「精密42会」を動かした背景です。国立大は、金集め、特に寄付

については完全に周回遅れなのです。

そうは言っても東北大学の場合、年間予算は先生方の御努力により5百億円レベル、片や今回の寄付が数十万円だからミジンコより小さいです。でも一見大きな総予算も、講座単位に降りてくると桁数が近づいてきます。更に「研究第一主義」を掲げる本学でも研究・教育以外に大学として多くの重要な任務を持っているのであり、お金が要るのです。ここに卒業生がお役に立てる場がありますね、皆さんの大学だから。

## 五. 若い卒業生もご理解を

お金という言葉が出たので触れませんが、皆さんご存知かどうか、この同窓会自体が財政的危機に瀕しており、その最大の原因は会費納入率10%にあります。若い人は一桁台！（同窓会ニュース第23号参照）。一方、前述した精密42会の寄付賛同率は50%越えでした。仮に本会が倒産でもしたら、これはブラックジョークです。

もちろん事務局は鋭意対策中ですが、私の懸念は、多忙を口実に大学への恩を忘れている若い人達がいらないか？ 歩んだ我が道を一瞬でも振り返れば、自分の今は自分の力だけでは得られなかったことに気付くでしょうに。

## 六. 「自分は母校に何ができるか？」

機械系卒業生の構成は、年次を縦軸に、各学科を横軸にしたマトリックスから成り、縦軸は100歳から22歳まで、横軸は毎年150名（現在は250名）。これに男女、大学院、留学生、先生等の切り口も有ります。これは3〜4世代に跨る一万四千人の巨大な集団であり、各位に様々な立場と考えることを重々

承知しますが、明白なことは、どの年次も必ず、浜辺に波が打ち寄せるがごとく卒業50年の節目を迎えるという事です。

ということで、私は皆さん一人一人に「自分は母校に何ができるか？」を自問自答してみることを勧めます。もしその解が寄付であり会費納入であるならば、速やかに行動されたら如何でしょうか？ 単刀直入で申し訳ありませんが。

この行為は親孝行と同列です。そして……皆さんへのお願いは、この一文を読まない同窓生への声掛けです。 完

（追）精密40組の皆様も卒業50年記念の寄付をされました。喝采！ 私は、これが「基金」と呼べる規模に成長することを夢見ています。

## 東京イベント開催

機械系同窓会幹事

榎 純一

（機械工学科53年卒）

機械系同窓会主催の講演会およびパネルディスカッション「EV・AI時代のモノづくりと機械工学の役割」を、平成30年10月13日に帝京大学霞ヶ関キャンパスにて開催しました。

5年後に不足する技術者は「機械工学」と言われていますが、EVやAI技術に注目が集まる一方で、機械工学の将来性や魅力を若い人たちに伝えきれないのではという反省があります。今回は同窓会会員はもとより、広く大学・研究機関・企業・関連官庁に参加を呼びかけて、技術と教育の振興に資する議論を考

え、構成は二部構成として、前半は講演会、後半をパネルディスカッションとしました。

基調講演は、株式会社ISIDエンジニアリング特別顧問で、元マツダ（株）取締役執行役専務（兼）パワートレイン開発本部長の羽山信宏氏より、「EV・AI時代の自動車産業における機能エンジニアリングの実践―SKYACTIVエンジン開発における機能エンジニアリング設計と機械工学の未来―」と題してご講演を賜りました。日本のモノづくりは技（匠）と構想力で一時期は諸外国に勝っていたが、今は構想力のレベルが下がってきたことへの危惧の念、技術者は経営者の思いを受け止める努力が必要なこと、「知らないことへの挑戦」意欲を掻き立てられてSKYACTIVの開発を決意したこと、現象を物理式で説明できるように要素試験でそれを確認







し、カラクリを積み上げて試作レスを目指し、最後に完成されたエンジンを実現する、というお話でした。その後の質疑応答も活発で、失敗とは正しいことに近づく過程である、世の中の価値を見極めてそれを実現するためのストーリー（シナリオ）が必要なこと等、非常に有意義なやり取りがありました。

それに続くパネルディスカッションは、機械系卒業の6名が登壇して『機械産業／機械工学を取り巻く環境の変化への対応／電動化が進展する中で機械工学の役割』と題し、創造力や構想力を持つ俯瞰（ふかん）的な学生に育てるためには何が必要か、講義は勿論大切であるが先生と学生が切磋琢磨する環境の大切さ、高校の段階で機械工学の面白さを知ってもらうための出前講義の有用さ等が語られ、AIに対しては、それを利用するにしてもモノがあつてこそなので機

械工学の重要性は将来も変わることがない、との共通認識の一方で、もう少し危機感を持つても良いのではというコメントもありました。

交流会は吉村同窓会副会長の乾杯のご発声で始まり、久々に会った同期との懇談、同業あるいは異業種の先輩・後輩との懇談が進み、ここでも有意義な情報交換ができました。

講演とパネルディスカッションには39名、交流会には36名の方にご参加いただきました。ありがとうございました。

今後も東京にてイベントを開催する予定でおります。

### 機械科学技術国際共同大学院プログラム

機械科学技術国際共同大学院プログラム代表

航空宇宙工学専攻 教授

吉田 和哉

国際共同大学院プログラムは、スーパーグローバル大学創成事業の一環として、現代的ニーズにマッチし、かつ、世界を牽引する高度な人材を育成すること等を目的とする本学の新しい学位プログラムとして、平成27年4月に最初のプログラムが開始されました。当初は、「スピントロニクス」「環境・地球科学」「データ科学」「宇宙創成物理学」の四プログラム体制にて開始され、平成30年4月からは、「生命科学（脳科学）」と「機械科学技術」が加わりました。

機械科学技術はグローバル化する社会の中で、わが国のイノベーションを牽引する重要な柱の一つであります。しかしながら、これまでの日本の研究者・技術

者は専門性を深化・緻密化させることは得意としながらも、システムとして技術全体を設計し要素技術を統合するシステム・インテグレーションが不得意であるとされてきました。本プログラムでは、航空宇宙およびロボティクスを中心とした、本学がこれまで実績を挙げてきた分野をベースとして、世界の最先端と切磋琢磨することによりシステム・インテグレーションを意識させた大学院教育を展開し、世界規模のイノベーションを牽引できる研究者や技術者を育成輩出することをめざしています。

機械科学技術国際共同大学院プログラムに採択された学生は、修士2年・博士3年の計5年間一貫の履修課程の中で、国際性を身につけるための履修を計画的に積み上げていきます。特に博士研究においては、計半年以上、海外の研究室において国際共同研究を行うことが必須となります。修士課程の頃から積極的に海外インターンシップに参加し、あるいは国際会議などで研究発表を行うなどの経験をj経て、博士研究においては、本学の指導教員と海外の受入大学・研究機関の教員・研究者との間の綿密な打ち合わせのもと、長期派遣型の国際共同研究を行います。その成果をベースに博士論文を仕上げます。論文審査の際には、相手先の教員も副査に加わってもらいます。機械系全体で各学年10名の学生がこのようなプログラムに挑戦することにより、機械系における教育・研究の国際化をさらに実質的なものにする可以考虑しています。

本プログラムに採択された学生には、修士1年修了時にQE1、修士2年修

了時にQ E-2と名付けた関門(Qualification Examination)を設け、常にプログラムの主旨に沿った履修が進んでいるか、チェックを行います。Q E-1以上の者には月額15万円、Q E-2以上の者には月額20万円の研究支援金が支給されます。また、条件を満たす場合にはこれらのチェックポイントから、本プログラムに中途加入することも可能です。

機械系では、既に平成22年度から大学院にて国際コースを開設し、大学院の講義も大半が英語化されており、これらのバックグラウンドに加え、本プログラムの開始にともない、外国人非常勤講師による特別講義や、英語論文執筆のスキルアップを旨とした国際化専門科目も導入いたしました。

平成30年4月には、修士・博士合わせて10名を採択し、同年10月には8名を採択しました。このペースにて半年ごとに本プログラムを充実させていく予定です。

なお、東北大学基金を通して、本プログラムに目的限定したご寄付をいただくことも可能です。本プログラムの持続的な発展に、皆様から温かいサポートをいただければ幸いです。

## オープンキャンパス開催

機械系広報推進室

渡邊 琴美

平成30年7月31日、8月1日の2日間の日程で、機械知能・航空工学科オープンキャンパスを実施しました。来場者数は、合計3,631名でした。工学部全体の来場者数は約1万人で、過去最高となりました。本年度は2日目に仙台で観測史上最高気温となる37.3度を記録し、例年になく猛暑の中での開催となりました。猛暑にそなえ、来場者への飲料の配布や、熱中症やその他安全衛生対策について例年以上の事前準備を行ったこともあり、大きなトラブルなく、2日間を盛況に終えることができました。

来場者に対しアンケートを行った結果、来場者の参加理由としては学校行事での来場が約半数となり、特に学校単位での団体参加が目立ちました。仙台市地下鉄東西線の開通から3年目を迎え、地下鉄での来場が半数、高校の貸切バスでの来場が4割となるなど、来場者の青葉山キャンパスへの来場方法が二極化しました。そのため、本年度は案内資料を配布する工学部の総合受付を工学部中央と地下鉄駅前の2か所設け、案内資料をもれなく配布することができました。青葉山駅から工学部東まで、工学部内を約7分間隔で往復するバスを本年度も工学部で特別運行するなど、工学部全体での利便性も向上した年となりました。

学科のテーマは昨年から継続して「ゆめ・きかい・東北大」とし、研究室公開を中心とした各企画を実施しました。研

究室公開には7コースで計101の公開テーマ数があり、各研究室で高校生向けに体験コーナーを設けるなど工夫を凝らした展示が行なわれました。アンケート結果によると、良かった企画として「研究室公開を挙げた方が6割を占め、「楽しかった」「説明が分かりやすかった」「興味深かった」「東北大学工学部に入りたい」等の感想が多数あり、大好評でした。特に学生の説明の丁寧さ、分かりやすさは毎年高評価をいただいており、高校生だけでなく、保護者の東北大学への好感にもつながっているようです。

オープン講義では、6コースから1名ずつ教員が40分の講義を行いました。他の学科の模擬講義よりも早い時間からスタートすることもあり、朝早くから目当ての講義を聴講しに来る来場者も多く、満席になる講義もありました。それぞれ



オープン講義の様子



機械知能・航空工学科受付の様子

の先生方が高校生向けにわかりやすく、工夫してくださったおかげで、新しく知る分野へ興味を持った来場者が多くいました。

企業展示を中心とした機械大博覧会では、5企業、2団体、1研究室の展示を行いました。大学での研究が、社会にどのようなにつながるのかを知っていたくとともに、説明員として企業からご参加いただいたOBの方々にご説明いただくことで、卒業後の進路の一例としても来場者にPRすることができました。

自動車の過去・未来館に展示されているクラシックカーのエンジン始動実演は、毎年工学部技術部と学友会自動車部の協力を得て、事前整備・当日のエンジン始動を行っており、昨年度不調であったT型フォードも今年度は整備により調子を取り戻し、A型フォードとともにより多

くの方にクラシックカーのエンジン音を体感していただくことができました。

学科インフォメーションでは、女子学生特別企画・学生生活情報コーナー・コンシェルジュコーナー等の企画を設け、見学のサポートや学生生活などの情報提供についても充実を図りました。

また昨年に引き続き、コースののぼり旗を計画的に配置し、来場者に会場内の誘導線を設けるとともに、会場全体にイベントの雰囲気を広げる演出をしました。

来場者には、本学機械系では幅広い分野の研究が世界トップレベルで行われていることを肌で感じてもらう良い機会になったことと思います。最後に、関係各位、ご参加、ご協力いただいた同窓会の皆様方に厚く御礼申し上げます。

## 学部3年生の近郊・学外見学報告

先端材料強度科学研究センター 准教授

竹田 陽一

機械系学部3年生の正規授業の一環として、各企業・研究所様のご理解とご協力を頂き、学外の工場等の見学を学科創設以来実施しております。機械工学に関する大学での講義や実験・実習が実社会においてどのように生かされているのか、企業における生産活動や研究開発の現場の見学を通して学ぶことを目的としております。

平成30年度の学部3年生は、平成28年4月入学者からのコース制度変更に伴いまして、昨年度までの4コースから新たに5コース体制となり、コース別に見学



を実施いたしました。機械システムコース47名、ファインメカニクスコース33名、航空宇宙コース41名、ロボティクスコース31名、機械・工学コース30名が、8月9日に仙台近郊から関東地区にかけて7〜8社を4日間にわたり見学しました。具体的には、トヨタ自動車東日本、NTTデータ、IH1、六本木エネルギーサービス、JFEスチール、JFEエンジニアリング、東芝、鹿島建設、新日鐵住金、荏原製作所、小松製作所、SUBARU、日本精工、三菱日立パワー



システムズ、ケーヒン、宇宙航空研究開発機構、日本航空、日産自動車、IH1エアロスペース、東京エレクトロン、カワダロボテイクス、ジャパンマリニューナイテッド、会津オリンピックバス、キャノンメダイカルシステムズ、テルモの各社様にご協力を頂きました。

本見学において、普段の大学生活では目にするのできない大規模な設備や先進の製造工程、研究開発過程を間近にし、大学で学んだ事柄がどのように実社会で使われているかを実感し、今後の勉学に対する意欲もこれまで以上に湧いてきたものと思います。また、多くの企業・研究所では機械系OB・OGの先輩方から業務内容のご紹介や質疑応答の時間を設けて頂きました。加えて、所内設備のご説明の際にもご自身の苦労話なども交えてお話頂くこともあり、気さくな雰囲気の中、学生たちからも活発に質問がなされておりました。諸先輩方の活躍する姿と情熱を直接感じ、自身の将来像を考えるなかでの大きな刺激になったものと考えております。

最後になりますが、ご対応下さいました皆様には、ご多忙のところ、事前の準備や当日のご対応に多大な時間を割いて頂きましたこと、数々のご配慮を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。今後このような機会を通して、実社会における工学実践や研究開発に触れる場を生徒たちに提供して参ります。毎年度の初頭には、引率担当教員が見学行程の計画を開始いたします。同窓会員の皆様をはじめ関係者の皆様に見学の受け入れをお願いすることもあるかと存じます。ご多忙のなかとは存じますが、変わらぬご理解

解とご協力を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

## 坂真澄教授最終講義

ファイナメカニクス専攻 准教授  
燈明 泰成

平成31年3月をもって、ファイナメカニクス専攻教授の坂真澄先生が定年退職を迎えられます。

坂先生は、1977年3月に東北大学工学部機械工学科を卒業され、1982年3月に東北大学大学院工学研究科機械工学専攻博士課程後期3年の課程を修了されました。その後、1982年4月に東北大学助手に就任され、1988年8月助教を経て、1993年9月に東北大学教授に就任されました。この間、1987年3月～1988年5月には西独フンボルト財団奨学研究员としてフ라운ホーファー非破壊検査研究所に留学されました。

坂先生は一貫して、破壊力学ならびにその適正な適用に不可欠な非破壊評価の研究と開発に精励され、さらに原子拡散制御に関する新しい学術基盤を構築して革新的な材料創製法を提案されるところにも、多数の研究者および技術者を養成されました。「延性破壊・動的破壊に関する破壊力学の先駆的な研究」において、高靱性材料からなる機械・構造物の弾塑性破壊を扱い、延性き裂の安定成長ならびに安定不安定遷移をき裂端塑性仕事変化率に基づき解明されました。また三次元き裂の動的応答を簡易に解析する手法も提案されました。「電流や超音波を

利用した先駆的な非破壊評価手法の創出」において、交流電流により応力拡大係数を評価する手法の開発をはじめとし、近接端子センサを考案して、直流電位差法に基づきき裂の定量的非破壊評価手法を開発され、発電プラントへの実用に供しておられます。また超音波探傷では、閉じたき裂の検査に係る問題点を国内外でいち早く指摘し、これを解決する革新的な超音波法を提案されました。「原子拡散制御基盤の確立と新しい金属微細材料作製法の創出」において、電子産業分野における破壊に関し、高密度電子流あるいは応力勾配を駆動力として生じる原子拡散現象を制御する学術基盤を構築し、これらを抑制、あるいは有効活用して微細材料を創出することに成功されました。

2011年にはSpringer社より原子拡散による材料創製に関する世界初の専門書「Metallic Micro and Nano Materials-Fabrication with Atomic Diffusion」を出版されておられます。

以上の研究業績に対し、米国実験力学会(R.E. Peterson Award (1992年))、4度の日本機械学会賞(1993、2001、2006、2007年)、日本機械学会材料力学部門業績賞(2006年)・功績賞(2018年)、日本非破壊検査協会業績賞(2007年)・協会賞(2014年)、市村学術賞貢献賞(2003年)などの賞を受賞しておられます。また学協会活動については、日本機械学会副会長、理事、監事、として、また日本非破壊検査協会会長、副会長、理事として当該学協会の発展に貢献をされました。

なお、最終講義は平成31年2月28日（木）、機械系第1講義室にて「新しい朝がくる」と題して行われます。

坂先生のご研究にかかわる貴重なご講演となりますので、是非ご参加下さい。

## 准教授着任挨拶

先端材料強度科学研究センター 准教授

市川 裕士



平成30年10月1日付で先端材料強度科学研究センター准教授に着任した市川裕士です。まずは、素晴らしい研究・教育の環境を与えて頂いたことに感謝申し上げます。

私はこれまで「コールドスプレー」と呼ばれる粒子を溶かさずに衝突させ積層する技術、すなわち固相接合現象による新しい材料創成技術を中心に研究を進めて来ました。この技術は従来の溶射技術などに代表される積層によるコーティング・表面改質を深化させ、そしてアディティブマニファクチャリングなど新しい材料プロセスへの応用が期待されています。今後これらのテーマを中心に据えて研究・教育に努めてまいります。

固相接合現象を理解し技術としてさらに発展させるためには材料力学・材料強度学をはじめとする機械工学が取り扱っ

てきた知識と経験が必要不可欠です。先端材料強度科学研究センターが主として取り扱う材料強度学は材料の強度信頼性を議論するための学術体系であることは言うまでもありませんが、材料がその姿や形を変えることを議論する学問でもあります。材料の予期せぬ変形は破壊・損傷として克服すべき問題となりますが、それをうまく活用し任意の形状に制御することは材料プロセスであるとも言え換えられます。また、材料強度学で扱う破壊の本質はき裂の進展、すなわちき裂先端の新生面の生成です。固相接合現象も非平衡な新生面の生成とそれらの接触による新しい界面の創成こそがその本質であり、実は材料強度学と同じものと考えることが出来ます。

このような視点に立つと、実学として新しい材料プロセスを実現することと学術としての材料強度学を発展させることは、私の目標とする研究課題の両輪を担うものであります。そして、その実現には後進の育成としての教育、さらには仲間との協働も欠かせません。研究第一、実学尊重、そして門戸開放の精神を大切にし、研究と教育、そして実学と学術をバランスよく織り交ぜた研究室運営を推進してまいります。

先輩方からのバトンをしつかりと引き継ぎ機械工学に新たなページを加えられるよう、微力ではありますが精進してまいりますので皆様からの温かいご支援をいただければ幸いです。

## 准教授着任挨拶

情報科学研究科 准教授

古澤 卓



平成30年4月に情報科学研究科計算数理科学分野の准教授に着任致しました。私は平成15年に学部生として機械系に入学して以来、学部生、大学院生、助教として機械系にお世話になっていきます。教育・研究を指導して頂いていた立場からそれを主導する立場に変化していく過程で、その重責をひしひしと感じております。多くの先生方、先輩方からのご助力に感謝し、職務を全うできるように日々尽力して参ります。

この紙面をお借りして私の研究内容を紹介させて頂きます。主な研究対象は数値流体力学を用いた超臨界流体流動の解明や数理モデルの構築です。超臨界流体は高温高压条件下の流体であり、効率や環境性の観点から近年では発電システムや微粒子生成プロセスなど多分野で利用が進められています。臨界点近傍では密度や定圧比熱が急激に変化することから理想気体の流動とは大きく異なることが予想されており、さらに工業利用では粒子生成や化学反応、凝縮などの物理現象を伴います。例えば、連続水熱合成反応では超臨界水と常温水溶液が混合するこ



とで反応器内部に酸化金属ナノ微粒子が生成します。また、超臨界二酸化炭素を用いた先進的な発電サイクルでは圧縮機が臨界点近傍条件で作動すると共に局所的に非平衡凝縮が生じることが予想されています。これらの利用の拡大と共に、超臨界流体の流動解析手法および数値モデルの確立が必要不可欠となっております。様々な分野における高効率なシステムの構築のために超臨界流体の熱流動の解明を目指して研究を行っています。今後も機械工学、情報科学のみならず、多くの他分野と接点を持ちながら研究活動を行っていききたいと思えます。

学内外で卒業生の方にお声がけ頂くことも多く、これまでに諸先輩が築き上げた伝統の重みを実感しています。社会に貢献できる科学技術の発展に寄与できるように、研究および教育に一層精励いたす所存ですので今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

## 准教授着任挨拶

ロボティクス専攻 准教授  
塚本 貴城



この度、ロボティクス専攻の准教授として着任いたしました、塚本貴城と申し

ます。同窓会誌にてご挨拶の機会をいただき、大変光栄に思います。まずは、御礼申し上げます。

私は、地元札幌の高校を卒業した後、東京工業大学で機械工学を学びました。東京工業大学では、修士研究を通して熱工学を学びました。また、授業のない時間には、独学で電子回路について学習しております。

東京工業大学を修了した後、石川島播磨重工業株式会社（現 株式会社IHI）に入社し、4年間で横浜の全社研究所で、その後の1年を田無、昭島の航空宇宙事業部の研究所で過ごしました。横浜の研究所では、微細流路を使った高排熱密度冷却器の研究開発や、伝熱数値計算の仕事をしておりました。事業部の研究所では、主にガスタービンの疲労寿命の統計的推定手法の開発をしておりました。

IHI在職中に、仙台の大学や企業を訪問する機会があり、その際、江刺正喜先生の研究室を見学させていただきました。充実した研究環境と、自分たちで装置を維持管理していく運営方針とに感銘を受け、江刺先生の研究室でより深く勉強がしたいと思うようになりました。社会人学生として入学する選択肢もありましたが、学業に専念したいと思ったため、IHIを退社して東北大の大学院へ入学いたしました。

東北大では、MEMS (Micro Electro Mechanical Systems) を用いた、熱抵抗可変デバイス（熱スイッチ）の研究を行い、2012年に博士号を取得いたしました。東北大では、MEMSを用いた微細加工に関する幅広い知識のみならず、真空装置の修理やソフトウェア開

発など、多岐に渡った経験をする事ができました。その後は、助教として東北大に在籍し、2018年4月に准教授に昇任いたしました。

私の専門分野は、MEMSデバイスの研究開発ですが、その中でも特に熱制御・測定に関するものや、慣性センサに注力しております。MEMSの研究には、機械工学全般だけでなく、電子工学や、化学等の幅広い分野の知識が必要となります。様々な場面で、これまでの経験を活かせる機会があり、この分野の研究は天職だと思っております。今後も、常に新しい分野の知識を吸収しつづけ、より幅広い研究を行っていききたいと思っております。



## 寄付に関するご報告

平成29年8月9日 精密42会（精密工  
学科昭和42年卒）より、機械系同窓会に  
ご寄付を頂きました。  
寄付金65万円也 誠にありがとうございました。  
いました。

平成30年7月12日 精密工学科昭和40  
年卒生有志の方々より、機械系同窓会に  
ご寄付を頂きました。  
寄付金58万円也 誠にありがとうございました。  
いました。

平成30年10月26日 東北燦々会（機械  
工学科昭和33年卒）より、機械系同窓会  
にご寄付を頂きました。  
寄付金81,495円也 誠にありが  
とうございました。

この場をお借りしまして厚く御礼申し  
上げます。





# 同期会報告

## 機械三十二年同期会

(六十年目の東北燦々会)

平成30年10月10日、東京で卒後60年の東北燦々会(以下会と書く)を開催した。卒業生55名逝去者7名。参加者は例年よりやや少なく男性23名女性6名。例年の参加者は40名前後である。夫人の参加者が10名前後であるのが特徴的である。最近では御主人の体調を気遣って同道されるやさしい婦人像が伺える。最近では日帰りの日程が増えてきた。

会の次第は逝去者への黙祷、幹事の挨拶と乾杯、近況報告、懇談、エンタメ、青葉萌ゆるの合唱、集合写真と、例年と変らない。

尚馬場氏が機械系同窓会誌22号に前年の模様を詳しく記されているので御覧下さい。

卒後60年となると年齢は83を超え。ほぼ毎年会が開催されてきたが輪番制とはいえ幹事の負担も大きく、又体の不調を訴える人も増えてきた。今回の開催に先立ち今後の運営について全員からアンケートをとった。

今後も継続する 8名  
今回で解散(停止する)他 27名  
席上いろいろ熱い意見もあったが本日ももって最終会とする事で意見がまとまった。

また会費については、各年度の幹事の努力の結果、毎年若干のくり越し金が残り、積み残されてきた。この処理につい



て意見を聞いた。ここでもいろいろな意見が出されたが、8万円と些少な額ではあるが、機械系同窓会に寄付する事でまとまり、会は15時に終了した。

終つてから会場のあちこちに立話をする姿が見られた。いざ終りとなると名残惜しさと若干の淋しさもあるがこれで良かったと思つている。各位のこれ迄の努力と協力を感謝する次第です。又何かの機会があればとも思いますが、ありがとうございます。

尚集合写真はいつもお願いしている戸田氏に今回もシャープな写真を撮つてもらいました。

北島 仁、佐川憲彦、中戸賢三(記)

二〇一八年東北燦々会幹事  
(機械工学科33年卒)

## 機械四十六年卒同期会

機械46年卒同期会の歴史は、卒業間もない昭和49年に有志19名が仙台地区に参集・開催後、しばらくのブランクを経て平成24年5月に仙台・秋保に14名が参集・開催されて以降、2年ごとに関東地区と仙台地区とで交互に開催されてきた(平成26年10月箱根に24名参集、平成28年11月松島に21名参集)。今回は関東地区開催の番となり、東京地区幹事会(安具業会と称す)の主メンバー9名(天津賀、河原、湖山、杉山、永橋、林、藤井、松平、若井)が2ヶ月毎に定例の会合場所である新宿の和食店に集まっては、「今回も思い出に残る楽しい同期会にしよう!」と1年前から具体的な構想を練つてきた。やはり温泉があり同期会の前後に観光出来る場所、また遠方より駆け付ける同期生も配慮して交通の便が良いところが望まれ、一方で好評だった前々回の箱根と同様に、他の宿泊客に気兼ね無く寛げる貸し切りの宿としたい等の様々な要望を勘案し、最終的に「平成30年11月10、11日、熱海にて開催」を決定した。上記開催を呼びかけたところ、同期生57名中(このうち4名が故人)、最終的に31名が参加を表明してくれた。これ迄で最多の参加者に安具業会メンバーも大いに力を得て、会計・観光・宴会・記録(写真含む)・渉外(同期生、宿泊先及び大学同窓会事務局との連絡他)等の役割を分担して準備を進めた。

11月10日当日は天気にも恵まれ、全員が熱海の宿「熱海青青荘」に三々五々集結した。既に熱海の観光地をいくつか

巡ってきた人もいれば、日程をなんとかやりくりして新幹線を乗り継ぎ宴会に駆け付けてくれた人もあり様々。でも、皆一様に宿に無事到着しロビーで顔を合わせると、一挙に47年前の卒業時に戻って、懐かしくも和やかな雰囲気醸し出されるのが不思議な心持ちであった。中には卒業以降初めて同期会に参加した同期生もおり、再会した途端、お互いの健康を喜び合いながらも本当に懐かしく、また学生時代の思い出がたちどころに蘇るのも、同じ時代と同じ空気の中で共に学んだことからくる強い連帯感が生み出すものなのだろう：と感じた。宿に到着後、皆は割り振られた部屋に落ち着いてあらためて旧交を温めたり、ひとまず風呂呂に入ったりして宴会迄の時間をのんびりと過ごした。

さて、宴会担当の杉山氏の発声で宴会を6時スタート、まずは鬼籍に入られた恩師の方々及び4名の同期生（小林正、鈴木芳夫、長谷川俊雄、渡辺昇）のご冥福を祈り、全員で冒頭1分間の黙祷を捧げた。幹事を代表して若井の挨拶の後、楽しみの一つともなっている31名の近況報告が始まった。最近の身の周りに起こった出来事、家族のこと、自身の健康問題と目下抱えている不安なこと、これ迄の仕事と今取り組んでいること、今後の計画・抱負等を率直に、時にユーモアを交えながら報告しあった。卒業以来47年にわたる人生で起こったいろいろなこと、短い報告の中にエッセンスとして凝縮されているように感じた。時に学生時代の失敗談とか今だから明かせる同期生間の困った経験等があらためて披露（暴露）されると、ドツと笑いが起きた。

風雪の中にあつても、皆一生懸命になんとか前を向いて生きてきた：という思い、良い意味の年輪みたいなのものがじわつと伝わってきた。お互い頑張ってきたなあ：と、暖かいものが場を包み込んでいた。これが同期会の良さなんだなあ：とあらためて感じられた。今回の報告の中で、古稀を迎えた同期生も多く、年齢的にも病気に関する話題が多くなるのは避けられないが、特に前立腺がんに関する複数の経験談はとても参考になった、また励ましにもなった：との声も多く聞かれた。

尚、当日午後の演奏会本番終了後に慌ただしく宴会に駆け付けてくれた河原氏が、早速持参のバイオリンにて、演奏会のレパートリーから数曲演奏してくれ、しばし場に芸術の香りが漂うとともに同期会の雰囲気をもぐつと盛り上げてくれた。拍手喝采の後には、また和気あいあいの宴会が続いたが、終盤藤井氏の音頭で学生歌「青葉もゆるこのみちのく」を全員で熱唱した。宴会後は、1室に全員が集合し、車座になったり、小グループごとに分かれたりして、12時頃まで心ゆくまで懇談の場となった。ここで驚愕と感嘆の声が挙がったのは、記録担当の林氏編集による「同窓会のあゆみ」に綴じられている昭和42年4月10日発行の東北大学新聞に、工学部（略称T）新入生全員の名前、出身地（都道府県）、出身高校が当時の1組から16組まで網羅されていることで、例えば自分が記憶している10組の登録No.「42T1046」が正しい事が裏付けられた。良くこのような資料が残っていたなあ：と、皆、林氏の資料保存能力と今回目の目を見るこ



平成30年11月10日 熱海・青青荘にて 31名集結  
 後列 松平、多賀、福永（信）、西村、渋井、津田、久保田、宮澤、永橋、濱、  
 米倉、清田、福永（喬）、湖山、齋藤、中村  
 中列 多田、河原、藤井、若井、小田桐、大津賀、内田、佐藤（実）  
 前列 山中、波多腰、杉山、矢崎、佐藤（光）、林、佐原

とが出来たことにあらためて敬意を表していた。

さて、翌11日朝は、次回2年後に仙台での再会を約し、お互いの健康とご家族の幸せを祈念しながら、熱海の観光地や美術館へと思い思いのコースに向かっていた。観光情報は担当の松平氏、永橋氏が事前に準備してくれ、大いに役立つたと感謝された。尚、今回は仙台地区在住のメンバーが、多賀氏をサポートして更に同期会を盛り上げていかれることを期待したい。また、今回会計担当の大津賀氏はじめ諸担当の皆さんの協力を得て成功裏に終わったことも併せて感謝するとともに、大学現況資料等を送付頂いた機械系同窓会事務局の武井様にも深く感謝致します。

若井 泰雄  
 （機械工学科46年卒）



## 機械五十年卒同期会

昭和50年機械工学科卒業のクラス会の報告です。

10月20日に銀座の香家で16名の参加で行いました。毎年秋季に実施しており、今回で4回目になります。卒業生79名のうち67名と連絡が可能になりましたが、住まいが全国に散らばっており東京・横浜近郊に住んでいる者が中心になってしまいうことが心残りです。直前に届いた機械系同窓会誌22号に載っていた「昭和三十七年機械卒同期会報告」のように全国各地で開くことが目標です。

私たちの学生時代は波乱に富んだものでしたので紹介しておきたいと思えます。卒業生は昭和45年と46年の入学者がほぼ半数ずつです。これは教養部時代の学生運動の影響によるものです。

中学・高校時代から激しくなった大学紛争は昭和44年に東大入試中止を迎えます。その結果、東北大学にも入試競争率の影響が残りと大変な受験環境でした。入学してみると教養部は学生運動が激しく、授業は殆どない状態でした。運動のテーマはベトナム反戦、成田空港闘争、大学授業料値上げ反対、女川原発反対、原子力船むつ反対、核付沖繩返還反対など、数多くの反対運動がありました。47年2月の期末試験直前に教養部に警察機動隊が導入され、これに抗議した多くの学生が試験をボイコットし大量の留年者を出したのです。この為、昭和48年4月の学部進級者は全学部で定員を大幅に越えました。しかし、私たちは入学時の2学年にわたる多くの友人を得ることがで



きました。大勢が一室に集まった製図実習などの楽しかった思い出が残っています。

卒業をはさんで2回の石油危機が起き、その後もバブル崩壊、アジア通貨危機、リーマンショックに見舞われました。2011年の東日本大震災の時は60歳の定年直前でした。津波に巻き込まれた者、大停電の対策に奔走した者、避難生活を余儀なくされた者などがいま。大変な会社生活を経験した人生でした。そんな私たちも全員が65歳を過ぎようとしており、現役を続けている者もぼちぼち引退という時期になりました。クラス会での話題はご指導いただいた先生方のこと、健康管理、孫、余暇の過ごし方などが中心ですが、いつの間にか学生時代の顔としゃべり方になっていないことが不思議です。

今回は来年11月9日に決まりました。

記念写真の名前を写真の中に記しておきます。みんないい爺さんになりました。

橋本 直  
(機械工学科50年卒)

## 機械五十五年卒同期会

平成30年11月3日、横浜中華街「龍華楼」にて機械工学科昭和55年卒同期会が開催され、同期生22名に大崎博之君の奥様(機械工学科歴代教授の秘書を務められ、現在も青葉山にて現役秘書とのことなので、機械系の皆様には超有名人?)も加わり、総勢23名の盛大な会となりました。

2年前の八王子での同期会で今回の横浜開催に向けて組織化、というか八王子同期会でアルコールの勢いも手伝って立候補した幹事団(岩波君、米沢君、亀山君、足立君、須々木君)が周到に準備をしてくれました。

まずは、同期会に先立って11月2日、3日に催行されたオプショナルツアーの模様を紹介します。

### 1. ANA機体工場見学

普段はなかなか近づけない飛行機のごそばまで寄って説明を聞くことができ、人気の高い見学コースのため、実現するかどうかドキドキものでしたが何とか滑り込むことができ、13名が参加しました。

ANAでエンジンがご専門だったという方が説明員で、恐れながら「青葉工業会一行」を名乗る(笑)われわれ機械屋の見学とあつてついで説明に熱が入り、丁

寧に対応いただきました。

2. ANAグループ安全教育センター  
チーフパーサーも経験され現在も時々  
乗務されるという方が説明員で、機内ア  
ナウンスの声でのご説明でした。事故の  
事実と真摯に向き合う姿勢、事故の悲惨  
さと安全堅持の重要性や事故発生のメカ  
ニズムなどを学ばせていただきました。

### 3. カップヌードルミュージアム

平成30年度のNHK連続テレビ小説  
「まんぷく」のモデルとなった日清食品  
創業者 安藤百福のミュージアムです。  
同期有志は「マイカップヌードルファク  
トリ」工房にて世界でひとつだけのオリ  
ジナル「カップヌードル」を作る体験を  
しました。

さて、本題の同期会懇親会は横浜中華  
街「龍華楼」での開催でした。

船崎健一・同期会会長の開会の挨拶、



物故者を偲ぶ思い出紹介に続いて懇親会  
へと進みました。卒業後初めて顔を合わ  
せる仲間もおり、お互いに名乗り合つて  
「学生時代から変わった、変わらない…」  
などと青葉山で学んだ当時は懐かしく振  
り返りました。

参加者23名全員のスピーチでは、20歳  
代から60歳を超えた現在に至るまでの  
様々な人生が語られました。家族のこと、  
仕事のこと、趣味のこと、将来のことな  
ど各人が本音で熱く話してくれました。  
中でも筆者が「過去の同期会と少し違っ  
かな？」と感じたことは、「これから第  
二、第三の仕事をするにあたって必要な  
勉強をしようと思っている」と何人もが  
語ったことでした。人生100年時代  
に向けて、還暦を迎えたくらいではまだ  
まだ若造、もう一度新たなことに挑戦し  
ようという仲間の意欲を感じ、自分自身  
の今後も考えさせられ、大いに刺激を受  
けました。

大崎君の奥様のスピーチは、「この会も  
まだまだ続きそうですが…」のくだりで  
参加者の大笑いを誘っていました。はい、  
機械五十五年卒同期会はまだまだ続きま  
すよ。次回は2020年仙台でホーム  
カミングデーに合わせて開催することを  
決め、再会を期しておひらきとなりまし  
た。

今回幹事の皆さん、素晴らしい企画の  
準備と実行ありがとうございました。同  
期の皆さん、また2年後元気に集まりま  
しょう！

遠藤 宏

(機械工学科55年卒)

## 精密三十二年卒同期会 (第二十回目の同級会)

平成30年(2018年)11月8日(木)  
の午後、東京駅丸の内南口前、JPタワー  
内にある、京料理の店「菜な」で、第20  
回目の同級会を開催しました。出席者は  
13名で、昨年より3名少なくなりました。  
毎年利用していた小石川後樂園内の「涵  
徳亭」は2019年5月下旬頃まで改修  
中です。

今年も同伴者との出席をお願いし、加  
藤夫人、町夫人が参加してくださいまし  
た。歩行に自信のない八戸は、妻と一緒  
に出席しました。

前々日、立冬を迎えたにもかかわらず、  
東京の気温は、日中の最高気温が20度で  
過ごしやすく、定刻までに全員が揃いま  
した。集合写真の撮影を、いつもどおり  
山崎勉氏にお願いしました。あまり広く  
ない部屋の中での撮影は、容易ではなさ  
そうでした。

数年前から、病氣療養中の早川浩二氏  
(柵澤研・筑西市)が、6月上旬に亡く  
なられました。大学時代同じ研究室だっ  
た、福来友康氏(塩竈市)に献杯の合図  
をお願いし、ご冥福を祈りました。

欠席者から寄せられた近況報告を見ま  
すと、入院中の人、術後の処置中の人、  
通院中で外出に不便を感じている人な  
ど、体のどこかの部分に悩みを抱えてい  
ます。

左脚の筋力回復に努めている小野傳氏  
(宇都宮市)は当日の出席者のために、労  
作の「ラトルバック」(楕円形状をした逆  
転こま)を作って持参してくれました。



写真説明  
前列左から、山崎 勉、町 眞次、町夫人、加藤夫人、八戸信昭、八戸の妻、福来友康、  
後列左から、小泉 晋、小林貞雄、小野 傳、加藤 洋、上西武仁、永田 充

いし、幹事を複数制にして開催準備を進めていきます。

八戸 信昭  
(精密工学科32年卒)

## 精密五十一年卒同期会

平成30年11月18日(日)、第3回同期会を開催しました。

私達、精密52卒同期会は、平成27年に卒業後初めて東京で開催をし、続けて平成28年に仙台で開催、そして2年後の本年、横浜での開催となりました。

明治150年となる今年、それをお祝いするそれらしい開催場所として、開港159年となる横浜が選ばれました。

横浜在住の5名(関口、田村、村木、村下、山岸)が幹事となり、横浜幹事会と称して、3回程の飲み会を重ね懇親を深めながら準備しました。これはこれで楽しく、今後も定期的な横浜飲み会が続きそうです。

さて、同期会ですが、1次会は午後1時から中華街での飲食、その後少しばかりの散策、そして、2次会は午後4時頃から海沿いのレストランで飲み直しという日程で、午後6時過ぎまで楽しく旧交を深めました。

1次会は、中華街の北京ダック専門店である「北京烤鴨店(カオヤータン)」というお店で、飲み放題・食べ放題コースを堪能しながら賑やかに過ごしました。今回は18名の参加で、それぞれが、趣味の話、家族の話、仕事の話、苦労話など近況を披露していました。不参加の方の近況も事前に送って頂いており、それらも纏めて印刷し配布しました。卒業



中華街の北京ダック専門店で会食

して41年、あの頃の若者が、それぞれ様々な経験をしてここに至り今を元気に生きている、感無量です。最後は、全員で「青葉もゆる」を謳って中締めとしました。

散策は、まさに横浜開港の地である山下公園から大栈橋を経由して大通りまでの少し長めのコースを辿りました。水川丸や大栈橋をバックに写真を撮りながらブラブラと、好天に恵まれ気持ちの良い散策になりました。大栈橋には、大型客船の飛鳥IIが停泊しておりましたが、ちようど私達が大栈橋に辿り着いたときにタイミング良く出航して行きました。

2次会は、大通りの海側にある「スカーンジア」という北欧風レストランで軽食とワインをいただきました。感じの良いレストランで日曜日の夕方でもあり客層はアベックが多く、酔っぱらいの親父軍

2003年のクラス会昼食会でお目にかかったとき、酒井高男教授からいただいた「針金による一筆書きこま」に触発され、長年かかって製作してきた、逆立ちこま(逆さこま)を、一人に2個ずつに配ってくれました。

出席者のなかには、83歳を過ぎて、まだ車の運転を続けている人もいれば、明日は友人とゴルフの約束がある人もいて、日々の生活のリズムは各人各様です。現役の認定社会福祉士としての仕事を継続し、2人の後輩福祉士の研修を指導している人もいます。

塩竈、沼津、三島、宇都宮、埼玉県、横浜から毎年集まり、顔を合わず機会に恵まれることに感謝しつつ、2019年の同級会も、東京駅周辺で開催することになりました。同伴者との出席をお願い





氷川丸を眺めつつ横浜港を散策

団は迷惑かなとも思いましたが、幹事会で事前に使用しておりお店にも了解を得ていたので、苦情も無く無事に大騒ぎできました(笑)。この2次会で、今後も同期会を2年毎に継続開催すること、次回は群馬支部の皆さんを幹事として伊香保温泉で開催することを決定しました。たいへん楽しみです。

最後に、精密52卒の皆様のご健康と楽しい人生を祈念いたします。  
山岸 憲一  
(精密工学科52年卒)



## 第 23 期（平成 30 年度）東北大学機械系同窓会 通常総会・特別講演会のご案内

拝啓 春寒の候、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。  
日頃、東北大学機械系同窓会の活動に対しご高配を賜り厚く御礼申し上げます。  
さて、第 23 期（平成 30 年度）通常総会ならびに特別講演会を下記要領にて開催いたします。今回は、マツダ株式会社代表取締役会長 小飼雅道氏（機械第Ⅱ 52 年卒）より「サステイナブル Zoom Zoom 宣言 2030 に基づくマツダのクルマ造り」と題した講演を賜ることになっております。皆様お誘い合わせの上、ご参加下さいませよう御案内申し上げます。

敬 具

記

日 時：2019 年 5 月 11 日（土）  
会 場：東北大学工学部中央棟 2 階大会議室  
（青葉山東キャンパス センタースクエア内）  
〒980-8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-04  
次 第：14:00-14:30 総会  
14:40-15:40 特別講演会  
題目：サステイナブル Zoom Zoom 宣言 2030 に基  
づくマツダのクルマ造り  
講師：小飼雅道 氏（機械第Ⅱ 52 年卒）  
マツダ株式会社 代表取締役会長  
16:00-17:30 交流会  
参加費：5,000 円



特別講演会（14：40-15：40）

「サステイナブル Zoom Zoom 宣言 2030 に基づくマツダのクルマ造り」

小飼 雅道 氏 マツダ株式会社 代表取締役会長

自動化や電動化の台頭により、100 年に一度の変革期と言われる自動車業界において、マツダは昨年、「サステイナブル Zoom Zoom 宣言 2030」を発表し、我々がクルマをお届けする目的・意義を改めて社内外に示した。

その根底にある想いは、全てを“人間中心”で考える事。クルマを通じてお客様の心とからだを元気にし、豊かな人生を送って頂きたいという願いに他ならず、その結果として、クルマは地球や社会と永続的に共存できると信じている。

この考え方に基づきマツダは、運転からの解放によって事故低減を図る機械中心の全自動運転ではなく、走る喜びと安全を両立するクルマを通して、誰もがいつまでも安心・安全に運転できるクルマ社会の実現を目指している。また地球環境保全に向けても、EV か否かという手段の議論ではなく、本質的な CO<sub>2</sub> 削減に貢献するために、理想の内燃機関に向けた技術開発を続けている。マツダが標榜する理想のクルマ社会と、マツダ独自のクルマ造りについて紹介する。

※ 出欠の連絡を同封の葉書にて、2019 年 3 月 29 日（金）までにご返信下さい。

※ 参加費は当日お支払いいただくか同封の振込用紙にてお振込み下さい。

## 事務局便り

◎ニュースレターの原稿を募集しています。

同期会報告、受賞などをご投稿して下さい。400字詰め原稿用紙約1～2枚程度、記念写真一葉と一緒に郵送ください。電子データ（メール、CD等）でお送り頂けると助かります。

（送り先）〒980-8579

仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-01 東北大学工学部 機械知能・航空工学科内

東北大学機械系同窓会事務局

Tel/Fax 022-795-6926

E-mail: dousou@mech.tohoku.ac.jp

ホームページ: <http://alumni.mech.tohoku.ac.jp/>

◎住所変更の場合、新住所をお知らせ下さい。

◎同期会の開催を支援します

同期会等の開催を支援致します。開催計画がお決まりになりましたら機械系同窓会事務局までご相談下さい。研究室見学をご希望、ご案内状の送付等できる限りのお手伝いをいたします。

◎機械系同窓会の会員数・・・現在 14,688 名

年会費・・・・・・・・・・・・・2,000 円

事務局業務日時:

月～金 9:30～17:30、水 9:30～16:30

FAX・メールは随時受け付け可能です。

## 会費納入について

会費納入にご協力いただきありがとうございます。会費納入方法の詳細は下記をご覧ください。

### 会費納入方法

#### ■ 郵便局（ATM）での会費納入

年会費（複数年度分）及び総会参加費の納入が可能です。同封の郵便局専用払込用紙をご使用ください。

#### ■ コンビニエンスストアでの会費納入

年会費1年分の納入が可能です。コンビニ専用払込用紙をご使用ください。複数年度分の会費納入は郵便局、オンライン、ネットバンキングをご利用いただきたくよろしくお願ひ致します。なおコンビニ専用払込用紙は、金額の修正をされずと取り扱いが出来ませんのでご注意ください。

#### ■ オンラインでの会費納入

下記の同窓会ホームページより、クレジットカードによる1, 2, 3, 5, 10年分の会費納入が可能です。

東北大学機械系同窓会ホームページ <http://alumni.mech.tohoku.ac.jp/>

#### ■ ネットバンキングでの会費納入

ゆうちょ銀行や他行からのネットバンキングにおいて下記口座より、年会費（複数年度分の納入も可能です）及び総会参加費の納入が可能です。誠に申し訳ありませんが振込手数料はご負担いただきたくよろしくお願ひ致します。

ゆうちょ銀行 229店 当座 0011176

皆様からご納入いただきました会費は、下記の同窓会活動に役立てております。

- 総会、各種講演会の開催
  - 同窓会誌の発行（年一回）、ニュースレターの発行（年一回）と送付
  - 同期会開催の支援、研究室見学支援
  - 学生会員への各種支援
- 今後とも、会費納入にご協力くださいますようお願いいたします。

## 学生支援に関するご報告

機械系同窓会では、現役学生に対し以下の支援を行っております。

- ・工明会運動会における機械系4専攻及び流体研の5つの院生会
  - ・機械系女子学生交流会
  - ・大学院生主催謝恩祝賀会
- また、機械系卒業生との交流会として機械系オープンフェスティバルを開催しております。

この場をお借りし、現役学生に対する多大なるご支援に対し会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

## 編集後記

同窓会ニュースレター24号をお送りします。青葉山キャンパスに農学部が加わり、ここ数年キャンパスはだいぶ様変わりしてきました。機会がございましたら、是非青葉山キャンパスまでお越しください。

最後になりましたが、原稿執筆にご協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

24号の表紙 青葉山新キャンパス キャンパスモール

### ■同窓会事務局

月・金 9:30～17:30 水 9:30～16:30

Tel/FAX 022-795-6926

E-mail dousou@mech.tohoku.ac.jp